



月刊部員新聞

2013年9月 第80号

編集・発行 Unit

TOKYO 2020

あれからすでに3週間が過ぎようとしています。その日は多くの方が早起きをして発表の時を待っていたのではないかと思います。出張前に少しだけ早起きをして、発表の瞬間をドキドキしながらテレビを見ていました。

東京でなかったら

もし東京でなかったら、日本のスポーツ界はどうなっていたでしょうか。強化のための予算は減少傾向にもかかわらず、国際的戦略も何もない競技者強化。中には予算もなく競技者強化すらもできなくなってしまう競技団体もあったかもしれない。もちろん競技者に限らず、その競技者を支えている指導者や私たちフィジカルコーチやケアトレーナー、道具

やアパレル関連の会社などスポーツに関連する全ての業種において、見通しの付かない状態に陥っていたかもしれません。

これからどうなる

開催国出場枠があるからといってそれに甘んじていけば、オリンピック・パラリンピックが終わってしまえば、今よりもひどい状況になるのではないかと思います。

そうならないために、まずは

スポーツを一元的に管理できるスポーツ庁の設立を期待したいです。各競技団体に任せっぱなしになるのではなく、国としてのような戦略をもってスポーツを育てていくのか。「金も出すけど口も出す」のスタンスで競技者強化を引っ張っていつてもらいたいと思います。そういう仕事を是非やってみたい

ものですね。まずは各種コーチの仕事で専門職とし、職域の明確化、専門職以外の指導の禁止、そしてその専門職同士の連携をサポートといったことを足がかりにして、世界で勝つための戦略を立ててみたいですね。

普及育成事業

この手の話に普及育成は欠かせません。しかし、世界的に見ても日本が大して強くない競技種目に誰が興味を持つでしょうか。強

さがあるからこそみんなが興味を持ち、やってみたいと思うのではないのでしょうか。普及育成だけ行っても強い競技者は現れません。裾野を広げることも大事ですが、順番としてまずやはり世界で戦える競技者を育成することが大切なのではないかと思いま

強化の戦略

まずはどのようにな競技種目にも通じるような概論、例えば「タ・テ・コ・ス・マ」

*のようないくつかあり、それを基にして強化を行ってゆく。それぞれの分野の専門職が世界トップを分析するだけではなく、そのトップを動かすための指導を競技者に与える。当たり前のことですが、果たしてそれは現在の日本ですべて行えるのでしょうか。

「タ・テ・コ・ス・マ」

全てにおいてやるべき事をきちんとしてやる。それだけで充分世界の強化につながるのではないかと思

東京オリンピックで人手不足？

今回のロンドンでもそうだが、各会場でのボランティアは大会運営の一部を担っている大切な人たちだ。しかしこのボランティアをどれだけ集めることができるのか。今後の課題になるかもしれない。特に来場者と接する機会のあるボランティアは、日本語以外での意思疎通能力も必須になってくる。しかし言語は単なる道具でしかなく、文法上正しく話すことは必ずしも正解ではない。言語の違いを受け入れ、「O-MO-TE-NA-SHI」の精神を持って来場者に接することができる人材。来場者の印象は、現場で接したボランティアの印象によって大きく左右される。

Unit代表 澤野 博(さわの ひろし)

日本体育大学卒。社会人経験を経て欧州へ留学。乳酸を中心としてトレーニングを幅広く学ぶ。帰国後、部員となって競技者を支えるという意味で「Unit」を設立。競技種目、競技レベルを問わずトレーニング指導を中心に活動。医療系国家資格の臨床検査技師の資格を持つ異色のフィジカルコーチ。NSCA CSCS、JADA DCOなども保有。ご意見、ご要望、仕事依頼、お問い合わせは下記まで。0422-34-5055(Fax 兼用)、090-1999-2845 または sawano@team-unit.com